

		昭 20	昭 20	昭 17	昭 8	昭 16	昭 11	昭 8	年月日
		8	6	9	1	7	11	ごろ	
		9		10	1	16	10		
		<p>ハルビン衛戍病院として編成完結 哈爾濱陸軍病院と改称（勅令第三八七号） 臨時編成下令 編成完結 哈爾濱第一陸軍病院と改称 関東軍第五六病院と改称 日「ソ」開戦 次のとおり患者を転入した。</p>							
8	12	8	14	8	14	8	11	14	概
阿城陸病より		フラルギより		北安より		阿城より		牡丹江より	
						ハイラルより		チチハルより	
								ニ〇〇〇名	
								五〇〇名	
								二〇〇名	
								三〇〇名	
								三〇〇名	
								四〇〇名	
								一六〇名	
		<p>要</p>							
		<p>摘要</p>							

哈爾濱第一陸軍病院
 （関東軍第五六病院）略歴
 通称号 満第七 監第一五五三一 部隊

終戦後の患者護送員の行動
金州、遼陽、旅順、柳樹屯等の各病院に患者輸送に従事した者は、その後それぞれ
の病院と同一行動をとつた。

病院長 軍医中将 嘉悦 三毅夫

(昭和16 12 1より終戦時まで)

昭 21					昭 20	昭 20	昭 17	<p>年 月 日</p> <p>概 要</p> <p>摘 要</p>	<p>哈爾濱第二陸軍病院 (関東軍第五七病院) 略歴</p> <p>通称号 満第四〇 部隊 監第一五五三二部隊</p>
4	10	9	9	9	8	6	9		
29	15	10	9	6	18		10		
<p>編成下令 編成完結 以後ハルビンにおいて、所在部隊の患者の診療に従事 関東軍第五七病院と改称 武装解除 満洲赤十字病院として患者の診断に従事、満洲赤十字病院勤務の看護婦約三〇名転入 「ソ」連軍の命令により有田病院長以下一二五名は列車によりハルビン出発 海林着 海林收容所内に「ソ」連軍管理下の関第五七病院を開設、診療に従事 海林收容所より患者を護送し、牡丹江市謝家溝元牡丹江第一病院跡に移動し、以後は謝家溝收容所の患者の診療に従事 病院の職員は、全員中共軍綏寧軍区後方病院に留用され、以後中国の内戦に参加した。その主力は昭和二八年三月の中共第一次掃還より同年十月中共第七次</p>									

	<p>帰還により帰国し、その他のものは、昭和二九年九月中共第八次帰還より昭和三年七月中共第二一次帰還により帰国した。</p>
	<p>病院長</p>
	<p>初代</p>
	<p>二代 軍医中佐</p>
	<p>終戦時軍医少佐</p>
	<p>有田 浩吉</p>
	<p>谷島 悟郎</p>

					昭 20	昭 17	年 月 日	新 京 第 一 陸 軍 病 院 略 歴 (関東軍第五陸軍病院) 通称号 満第八七五部隊、監第一五五二九部隊
8	8	8	8	8	11	概 要		
17	15	13	12	9	20			
<p>病院長以下職員の主力および患者約五〇名は新京に移動、残置隊と合流病院業 停戦</p> <p>患者を吉林分院、通信隊、女学校、小学校等に病院開設</p> <p>吉林着</p> <p>職員の一部および移動困難なる患者を残置し主力は新京出発</p> <p>開戦と同時に付近に原隊を有する独歩患者を原隊に復帰せしむ</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>爾後同地において在満部隊の主として外科患者の収療に従事</p> <p>吉林分院を継承</p> <p>新京において新京陸軍病院の職員の一部の人員を基幹として編成完結</p>							概 要	
							摘 要	

1814

	昭 21	昭 20
7	5 4	8 8
18	15	20 10
<p>務を続行</p> <p>新京第二陸軍病院の残置患者約九〇名を収容</p> <p>「ソ」軍進駐、武装解除</p> <p>病院長村上軍医少将「ソ」軍に連行軍医少尉黒岩陸随、日「ソ」開戦以後同年九月末日迄の死亡者小川固吉少将以下約九〇名の慰霊祭を施行</p> <p>「ソ」軍撤廃迄に二回に亘り職員の一部入「ソ」</p> <p>中共軍の進駐により病院を閉鎖し、新京安民病院を設置軍医中尉篠原弘蔵以下職員八三名、重症患者約五〇名は中共軍に留用同病院に収容</p> <p>安民病院の状況</p> <p>安民病院はつぎのとおり区分されていた</p> <p>東崗寮（内科患者の収療）</p> <p>南冥寮（外科患者の収療）</p> <p>北辰寮（一般邦人の収療）</p> <p>移動困難なる患者約一〇名と、これが看護のため職員四名（軍医見習士官中村英郎、看護婦長土田とよ、看護婦白井久江、平岡ナナエ）を残置し軍医中尉篠</p>		

昭 20					
9	8	8	8	10	8
13	26	25	17	2	18
<p>原弘蔵以下職員約八〇名、患者約二〇〇名帰還のため新京出発、錦県において院長代理軍医少佐田中幸夫以下職員四名、患者一〇名と錦県収容所に収容博多上陸復員</p> <p>錦県に残留した田中軍医少佐以下博多帰還</p> <p>吉林分院の状況</p> <p>病院長以下新京本院復帰後軍医中佐深田益男を長として病院業務続行</p> <p>入院患者中吉林付近に家族のある者は本人の希望により退院せしめ移動困難なる者は吉林満鉄病院に転送</p> <p>病院を閉鎖</p> <p>軍医中尉磯部喜博以下二三名、患者約五〇名は平壤に移動、三合里に収容されたがその後平壤第一中学校に開設中の病院に入る</p> <p>病院は「ソ」軍に接收され閉鎖</p> <p>将校は美勒洞に下士官、兵は三合里に収容され所在部隊と同行動</p>					

昭 22	昭 20
3 12	10
23	20
院 長 村 上 徳 治 医 中 将 佐 世 保 帰 還 興 南 に 移 動、同 地 病 院 に 留 用 主 力 延 吉 移 動 後 残 留 し た 婦 長 以 下 約 三 〇 名 は 病 院 に 留 用 同 病 院 主 力 は 延 吉 に 移 動 同 地 病 院 に 留 用 さ れ た 看 護 婦、重 症 患 者 は 平 壤 第 一 陸 軍 病 院 に 収 容	

オ十八

昭18	昭17	昭11	年月日
頃	11	11	
	20	10	
<p>昭18頃より予備軍医候補生の教育を実施した</p> <p>同時に職員の一部をもつて新京第一陸軍病院を孟家屯に新設した</p> <p>新京第二陸軍病院と改称</p> <p>軍病院に転送した。</p> <p>爾後付近所在部隊の患者の収療に任じ外科患者の一部を熊岳城、興城第一に、伝染、結核、精神病患者の一部を大連、旅順に、内地還送患者を奉天等の各陸軍病院に転送した。</p> <p>昭17年11月</p> <p>昭11年11月</p> <p>昭11年10月</p> <p>勅令第三八七号により新京陸軍衛戍病院（新京菊水町）を新京陸軍病院と改称</p> <p>分院 吉林</p> <p>拉法……「ノモンハン」事件当時病院に昇格していたが部隊の移動に伴い廃止された</p>			<p>概</p> <p>要</p>
			摘要

新京第一陸軍病院略歴
 (関東軍第七陸軍病院)
 通称号 満第一一四部隊、監第一五三〇部隊

						昭 20
8	8		8	8	8	8
28	20		21	20	15	12
<p>日「ソ」開戦</p> <p>同時に軽症患者を原隊に復帰せしむ</p> <p>橋口軍医大尉以下約七〇名の職員と移動困難なる患者約九六名を残置し病院主力は患者とともに自動車および列車により通化に移動</p> <p>通化省、停戦となる</p> <p>重症患者約六〇名を通化陸軍病院に転送し同日夜半同地出発</p> <p>平壤着</p> <p>同時に重症患者を平壤第二陸軍病院に移送他を同地第一中学校に病院開設中の関東軍衛生下士官候補者隊に移送、職員は同地山手国民学校に収容され病院を開設所在部隊の収療に任じた</p> <p>武装解除されたが病院業務を続行</p> <p>病院閉鎖、院長以下職員の主力は南山国民学校に病院開設中の公主嶺陸軍病院に合流、一部および患者は第一中学校の病院に合流</p>						

オ十一内

昭 21					
3	8	8	9	9	
26	22	19	18	10	
	「ソ」軍の管理下より中共軍の管理に入り病院は解散、患者は公主嶺満鉄病院 同地に病院を開設、患者の収療に従事 移動	患者全員を新京第一陸軍病院に転送 橋口軍医大尉以下職員は診療班として第三十軍司令官の指揮下に入り公主嶺に 移動	新京残留者の状況	平壤第一中学校病院（関東軍衛生下士官候補者隊）について 病院を閉鎖し看護婦、女子職員（鉄嶺陸軍病院よりの転入者）および患者を平 壤陸軍病院に移送し職員は三合里収容所に収容された	南山国民学校病院（公主嶺陸軍病院）について 病院を閉鎖し看護婦、女子職員および重症患者を平壤第一陸軍病院に転送、院 長以下職員は三合里収容所に収容され爾後將校は美勒洞に収容さる

に収容、職員は中共軍に留用され同年九月帰還
病院長

医大佐	伊	吹	月	雄
医大佐	榔	野	敬	
医大佐	村	上	徳	次
医大佐	岩	橋	利	夫

						昭 7 年 11 月 11 日		昭 7 年 11 月 11 日		昭 7 年 11 月 11 日		昭 7 年 11 月 11 日		昭 7 年 11 月 11 日		昭 7 年 11 月 11 日		
						10	8	8	8	8	8	8	0	8	7	11	10	10
						80	22	21	20	16	10		1	16	10			
<p style="text-align: center;">公主嶺陸軍病院 (関東軍第二七陸軍病院) 略歴</p> <p style="text-align: center;">通称号 満第二四八 部隊 監第一五五二八 部隊</p>																		
<p>概要</p> <p>公主嶺衛戍病院創設</p> <p>公主嶺陸軍病院と改称(勅令第三八七号)</p> <p>臨時編成下令</p> <p>編成完結</p> <p>関東軍第二七病院と改称</p> <p>公主嶺出発</p> <p>通化省輯安着、野戦病院開設</p> <p>輯安出発</p> <p>鮮満国境通過</p> <p>平壤着</p> <p>「ソ」連軍管理下の平壤第一陸軍病院長の指揮に入り病院勤務</p> <p>病院主力は第一梯団として咸興を経て延吉に移動</p> <p>延吉において、「ソ」連軍管理下の延吉病院の勤務員となり入「ソ」に堪えない病弱者の診療に従事</p>																		
<p>摘要</p>																		

	昭
	21
	4
	20
<p>延吉病院は閉鎖となり次の行動をとつた</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 健康者は作業大隊に編入され入「ソ」 2. 衛生勤務員の大部分は中共軍に留用され、その後中共の内戦に参加し昭和二八年より同三三年までの間に帰国した。 3. 前記以外の者は昭和二十一年の計画選送により昭和二十一年十月四日博多上陸終戦後、病院主力と別れ、三合里、咸興等において作業大隊に編入され入「ソ」したものがある。また、雇傭人等は輯安、平壤等において解雇（傭）され、邦人群に入り、帰国したものもある。 <p>病院長 軍医大佐 須野敏夫 (昭17 2 9 終戦時)</p>	

昭和二十二年八月

昭 20	昭 20	昭 15	昭 11	昭 7	年月日	<p style="text-align: center;">四 平 陸 軍 病 院 略 歴</p> <p>（関東軍第三三陸軍病院） 通称号 満第九〇七 部隊 監第一五五二七 部隊</p>			
11	8 中旬	8	8	6			7	11	ど
10		20	14				10	10	ろ
<p>概 要</p> <p>四平衛成病院創設</p> <p>四平陸軍病院と改称（勅令第三八七号）</p> <p>軍令陸甲第一四号により編成改正</p> <p>関東軍第三三病院と改称</p> <p>病院主力は海竜に移動</p> <p>海竜に移動したは本院に復帰</p> <p>終戦後も引続いて「ソ」連軍の管理下において病院業務に従事</p> <p>東北満の陸軍病院からの後送患者約二、五〇〇名を収容</p> <p>海竜より患者約三〇〇名収容</p> <p>第三九師団の患者約二〇〇名収容</p> <p>揚木林収容所より患者約三〇〇名収容</p> <p>奉天陸軍病院に患者約一三〇〇名を移送</p> <p>四平陸軍病院の職員の一部および四平陸軍病院入院患者中、軽症約二七五名は、</p> <p>四平（城島突）作業大隊に編入</p>									
						摘要			

昭	昭		
21	21		
7	5	5	11
18	28	27	16
<p> 四平出発 満洲里經由、イルクーツク地区に入「ソ」残余の者は依然谷島四平 陸軍病院長の指揮により病院勤務 職員、患者全員奉天に移動 奉天着、興亜会館に収容 逐次奉天を出発シコロ島經由帰国 復員完結 </p> <p> 病院長 軍医中佐 佐 沢 直 (昭 19 9 27より昭 20 8 まで) 軍医中佐 谷 島 悟 郎 </p>			

昭和
七
年

187

昭					昭		昭		昭		昭		年月日	鉄嶺陸軍病院 (関東軍第四陸軍病院) 略歴 通称号 満第八九 部隊 監第一五二六部隊		
21					20		20		15		11				7 ごろ	
7	6	6	6	6	8	6	7	11	4	21	12	8				1
<p>鉄嶺衛成病院創設</p> <p>奉天陸軍病院と改称(勅令第三八七号)</p> <p>軍令陸甲第一四号により編成改正</p> <p>関東軍第四陸軍病院と改称</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>所在部隊および支那派遣軍の患者の診療に従事していた。</p> <p>終戦後は「ソ」連軍の管理下において病院勤務</p> <p>病院長以下の職員および入院患者全員鉄嶺出發</p> <p>コロ島出發</p> <p>佐世保着</p> <p>博多港着</p> <p>博多上陸復員完結</p> <p>病院長 (昭19 7 1以降)</p> <p>軍医中佐 佐々木恒助</p>													概要	摘要		

1826

		年月日				
		昭 20	昭 20	昭 16	昭 11	昭 6 ご ろ
		8	6	8	7	11
		9		1	10	10
	概	<p>奉天衛戍病院創設 奉天陸軍病院と改称(勅令第三八七号) 臨時編成下令 編成完結 関東軍第三陸軍病院と改称</p>				
	要	<p>本病院は、昭和1811以降支那派遣軍よりの選送患者を主体とし、東北満前線病院よりの選送患者、関東軍内地選送患者の収療及び奉天(その近傍を含む)所在部隊の患者を収療していた。 従つて患者は、支那派遣部隊の外全満の部隊の患者を収容中に日「ソ」開戦となつた。 日「ソ」開戦後次のとおり患者を受け入れた。 1 昭20 8 18 白城子陸軍病院より 三二五名 2 昭20 8 14 四平陸軍病院より 一三〇〇名 3 昭20 8 17 錦州陸軍病院より 九〇〇名</p>				
	摘 要					

奉天陸軍病院
(関東軍第三陸軍病院) 略歴

通称号

満第一四五 部隊
監第一五五二五 部隊

昭 20	昭 20
8 下旬以後	8 15以降
<p>次のとおり病院から転出した。</p> <p>1. 昭20 8 18 天津第153兵站病院に二五八名</p> <p>2. 昭20 8 20 「ソ」連軍管理下の奉天第二病院（白城子陸軍病院主体） に 三〇〇名</p> <p>3. 昭20 8 19 「ソ」連軍管理下の奉天第三病院（海拉爾第二陸軍病院主体） に 八四二名</p> <p>4. 昭20 10 下 「ソ」連軍管理下の奉天第四病院（熊岳城陸軍病院主体） に 三五〇名</p>	<p>7 開戦時以降の所在部隊より 三〇〇名</p> <p>6 昭21 8 9 「ソ」連軍管理下の奉天第三病院より 六〇〇名</p> <p>5 昭20 9 14 熊岳城陸軍病院より 六五〇名</p> <p>4 昭20 8 20 寧安陸軍病院より 五〇〇名</p> <p>終戦後、次の病院を受け入れ「ソ」軍の管理下において患者の収療に従事した。</p> <p>1 昭20 8 10 海拉爾第二陸軍病院を富士分院に合流（ソ）連軍管理下の奉天第三病院と呼称）</p> <p>2 昭20 10 下旬 熊岳城陸軍病院を北陵分院に合流（ソ）連軍管理下の奉天第四病院と呼称）</p>

昭		
21		
8	6	5
9	2	20
<p>舞鶴上陸 患者等も昭和二十一年一月下旬までには帰国している。</p> <p>病院長 軍臣大佐 林 利 治</p> <p>(昭19 8 25 以降)</p>	<p>奉天出発 第四病院の所属者は、その後帰国して、残務整理者、重症</p>	<p>5. 転症患者病院より北陵収容所に転出し、同収容所編成の作業大隊に編入され入「ソ」 一九三八名</p> <p>6. 現地退院 四〇〇名</p> <p>7. 自発的に退院して奉天難民収容所等に転出した者 五〇名</p> <p>8. 昭21 6 末 鉄西病院に 九六名</p> <p>9. その他中共軍留用となつた者が若干名ある。</p>

				昭 20	昭 16			年 月 日	概 要
9	8	8	8	8	8	8	7		
14	20	18	15	9	1		16		
<p>現地応召者、軍属等の一部召集解除又は解雇備 全員奉天に移動、同地国民学校に奉天第四病院開設</p>				<p>熊岳城に所在せる第八九兵站病院の指揮下に入る</p>			<p>熊岳城において編成完結</p>		<p>熊岳城陸軍病院略歴 (関東軍第五二陸軍病院) 通称号 満第八部隊、監第一五五二一部隊</p>
<p>患者の一部を奉天陸軍病院に転送 同地において武装解除</p>				<p>日「ソ」開戦</p>			<p>臨時編成下令</p>		
							<p>引続き所在部隊および北支方面よりの転送患者の収療ならびに前後送に従事</p>		摘要

							昭 20
		11	11	11	10	10	9
		20	7	5	27	29	28
		<p>重症患者を奉天第一病院（奉天陸軍病院）に転送 職員患者中の一部は第五三作業大隊編入 奉天出発 黒河経由入「ソ」 職員、患者ともに北陵に収容 主力は第五五作業大隊編入 奉天出発 満洲里経由入「ソ」 一部奉天付近の病院又は中共軍衛生部等の中共軍施設に留用された者は昭和二十一年十一月頃迄に帰還した</p>					
		<p>病院長 医中佐 金城政龜</p>					

年月日	概 要
<p style="text-align: center;">大連陸軍病院略歴</p> <p style="text-align: center;">(関東軍第一陸軍病院) 通称号 満第九〇〇部隊、監第一五五一八部隊</p>	<p style="text-align: center;">昭和14年8月6日</p> <p>明治三十七年六月大連兵站病院として発足、その後旅順陸軍病院の拡張により大連分院となる</p> <p>編成改正により独立して大連陸軍病院に昇格</p> <p>特臨編一六令付第三四号臨時編成甲下令、編成を拡張する</p> <p style="text-align: center;">編 成</p> <p>本院……長、医大佐吉村文夫（主として軽症の胸部失患及外科）</p> <p>分院、南山隊……長、医大尉樋口友次郎（花柳病耳鼻眼科及内科の一部）</p> <p>沙見隊……長、医中尉星晴隆（内科及結核解放性）</p> <p>爾後全満および北支部隊の結核患者、精神病患者等の収療を主とし一部駐屯部隊の患者の収療に従事</p>
<p style="text-align: center;">摘 要</p>	

1832

		昭 20	昭 17
9	9	8	4
24	17	14	7
<p>その後金州分院設置</p> <p>第一〇一兵站病院を指揮下に入れ金州分院を担当せしむ</p> <p>金州分院は独立して金州陸軍病院となり指揮下を脱す</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>哈爾濱陸軍病院よりの転送患者(含職員の一部)約二〇〇名収容</p> <p>停戦</p> <p>職員、軍属等のうち満洲に家族を有するものは召集解除又は解雇備し患者の一部も退院す</p> <p>武装解除後も病院業務続行</p> <p>柳樹屯陸軍病院、第一九三兵站病院大連移動により重症患者四七〇名を汐見分院に収容</p> <p>旅順陸軍病院より職員患者約四〇〇名転入</p> <p>日之出国民学校に収容中の柳樹屯および第一九三兵站病院は再び柳樹屯に移動</p> <p>一部女子勤務員残留大連陸軍病院の指揮下に入る</p>			

						昭 21					昭 20	
6	6	6	6	6	5	5	4	3	12		11	11
80	14	7	3	1	20	19	19	13	1		20	17
<p>本院、各分院職員患者大連出発 海城着</p> <p>元鉄道第四連隊跡に収容され病院業務続行</p> <p>院長吉村軍医大佐「ソ」軍に連行され、吉岡衛生少佐院長代理となる</p> <p>職員大塚少尉以下患者を含み約一六〇名中共軍に連行されたが約一ヶ月後帰院</p> <p>海城において死亡せる二五六柱の慰霊祭を挙行</p> <p>病院を閉鎖し道家中尉以下職員二二名、移動困難なる患者九六名を海城病院に</p> <p>残置し主力は奉天に向つて出発</p> <p>奉天省興亜会館に収容</p> <p>奉天出発</p> <p>「コロ」島着</p> <p>同港出帆</p> <p>博多上陸復員</p> <p>海城残留者海城出発</p>												

			昭 21
		7	7
		10	4
			3
		博多上陸復員	「コロ」島着
	院長	博多上陸復員	「コロ」島着
	医大佐	博多上陸復員	「コロ」島着
	吉村文雄	博多上陸復員	「コロ」島着
	伊佐信雄	博多上陸復員	「コロ」島着

才十三内

年 月 日	昭 11	昭 16
	11	7
	10	16
	1	8
概 要	<p>旅順陸軍病院の前身は日露戦争直後露軍の病院を接收し旅順陸軍衛戍病院として発足した</p> <p>支那事変以前は本院を乃木町に置き所在部隊の診療に従事、分院を大連に設置専ら内地還送患者の業務に従事した</p> <p>支那事変発生に伴い支那方面の戦傷病患者および満洲各地よりの内地還送患者等の収療還送等の業務に従事</p> <p>勅令第三八七号により旅順陸軍衛戍病院は旅順陸軍病院と改称</p> <p>軍令陸甲第三五号により編成下令</p> <p>大連分院を分離し大連陸軍病院に昇格</p> <p>編成完結</p>	
摘 要		

旅順陸軍病院略歴

(関東軍第二一陸軍病院)

通称号 満第七九部隊、監第一五五一七部隊

昭 20		
8	8	8
22	15	9
<p style="text-align: right;">編 成</p> <p style="text-align: right;">本院（乃木町）</p> <p style="text-align: right;">分院（模珠礁）</p> <p style="text-align: right;">分病棟、土屋隊（土屋町） ……………既設</p> <p style="text-align: right;">千歳隊（千歳町）</p> <p style="text-align: right;">松村隊（松村町）</p> <p style="text-align: right;">水師管隊（水師管） ……………新設</p> <p>全満および中国部隊の長期療養患者（主として結核および精神病患者）の収療 転送等を実施し、かつ関東軍補給監部関係各病院の短期軍医候補者の教育実施</p> <p>日「ソ」開戦直前土屋分病棟を閉鎖し全員本院に合流、患者は本院精神病棟に 収容</p> <p>日「ソ」開戦とともに軍医候補者特別補充教育を中止し候補者を原隊に復帰せしめた</p> <p>終戦直後哈爾濱第一陸軍病院よりの後送患者（主として東満部隊）を収容</p> <p>「ソ」軍進駐</p>		

十三外

昭 21								昭 20
6	1	10	10	9	9	9	9	8
16	18	28	25	19	16	14	4	22
<p>在満応召者、軍属等の一部を召集解除、解雇備す</p> <p>「ソ」軍の命により本院を水師營に移動し水師營隊を合流、海軍病院を併合し患者約四〇名を収容</p> <p>千歳、松村両分病棟の重症患者を大連陸軍病院に転送</p> <p>千歳、松村両分病棟本院に合流</p> <p>模珠礁分院本院に合流</p> <p>第一梯団として職員の主力、患者の一部、家族一二六名水師營出發、同日鞍山着、鞍山製鉄会社付属病院、満鉄病院等に病院開設、又遼陽第一陸軍病院鞍山および湯崗子分院を指揮下に入れ一部の職員患者等を収容病院業務を開始</p> <p>橋本軍医大佐以下職員患者の約半数海城に移動</p> <p>鞍山残留者の状況</p> <p>引つづき同地において病院業務を続行</p> <p>職員三名中共軍に連行されたが鞍山軍医大尉以下一三名は四月六日帰院</p> <p>製鉄、満鉄両病院収容中の職員、患者は奉天に移送、興亜会館に先着せる海城</p>								

昭21			昭20			昭21		
6	5	12	10	7	7	6	6	
30	19		26	17	4	30	27	
<p>海城に残留せる一部海城出発</p> <p>職員、患者の大部奉天に移動、興亜会館に収容</p> <p>水師營残置者海城に追及合流</p>			<p>海城移動者の状況</p> <p>海城到着後元鉄道第四連隊跡に収容、旅順より職員として行動をともした女子師範生徒の大部を帰郷せしむ 又患者約五〇名は「ソ」軍に、職員、患者約二〇名は中共軍の衛生勤務のため連行さる</p>			<p>移動群と合流</p> <p>湯岡子分院収容中の職員、患者奉天に合流</p> <p>早川軍医少尉以下職員八名重症患者約四三名を残置主力は奉天出発</p> <p>錦州にて衛生勤務員として職員五七名残留</p> <p>「コロ」島出帆</p> <p>仙崎上陸帰還</p> <p>奉天、錦州等の残留者は中共軍留用後逐次帰還</p>		

		昭 20	昭 17	年 月 日	概 要	
11	8	8	11			
15	15	9	20			
<p>軍属約一〇名を残置し前班、後班に区分し海城に移動、元鉄道第四連隊の兵舎</p> <p>又牡丹江に綏陽等の女学生約二〇名を収容し家族と同行動</p> <p>哈爾浜陸軍病院より職員二五名、患者約三〇〇名を収容</p> <p>停戦後在満応召者および朝鮮人約二〇名を召集解除</p> <p>停戦</p> <p>開戦とともに所在部隊の患者の一部原隊復帰</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>爾後金州以北の在満部隊および支那派遣軍等の患者の収療、前後送等に従事</p> <p>満病院より差出人員をもつて編成完結</p> <p>関東州金州において綏陽、海拉爾他陸軍病院、第六六、第一〇一兵站病院等在</p>				<p>金州陸軍病院略歴</p> <p>(関東軍第六陸軍病院)</p> <p>通称号 満第八八六部隊 監第一五五一九部隊</p>	摘要	

											昭 21	
7	6	7	7	6	6	5	5	5	5	5	3	
1	30	10	2	30	13	20	25	23	20	19	20	
奉天着	海城残置者海城出發	博多上陸復員	「コロ」島着	後班奉天出發	博多上陸復員	「コロ」島出帆	「コロ」島着	前班奉天出發	奉天着、興亜會館に収容	病院は職員の一部および重症患者を海城病院に托し奉天に移動	その後田岡軍医少尉以下職員二〇名中共軍衛生業務援助のため連行	職員、患者約一四二名中共軍に連行されたが四月二十日全員帰還 に収容、重症患者を海城陸軍病院に転送

十五

		7	7
		10	4
	博 多 上 陸 復 員	「 コ ロ 」 島 出 帆	「 コ ロ 」 島 着
	病 院 長		
	医 中 佐		
	福 沢 益 人		

		昭 20		昭 16		昭 13		年 月 日		
		8	8	6	11	8	7		9	9
		14	9	末	20	1	28		18	1
収容	遼陽陸軍病院より約五〇〇名の患者転入、内約一五〇名を第一九三兵站病院に	日「ソ」開戦	第一九三兵站病院を指揮下に入る	軍令陸甲第八一号編成改正（復帰）完結	編成完結	臨時編成下令	爾後全満および中北支部隊の後送患者の収療および前後送等に従事	旅順陸軍病院柳樹屯臨時病院の施設および業務を継承し柳樹屯陸軍病院を開設	虎林第一陸軍病院柳樹屯に移駐	
	概要									
摘要										

柳樹屯陸軍病院略歴

(関東軍第五一陸軍病院)
通称号 満第三九九部隊、監第一五五二〇部隊

						昭 20
11	10	10	9	9	8	
17	13	7	24	16	15	
<p>又哈爾濱陸軍病院よりの転送患者約三〇〇名を収容、</p> <p>停戦</p> <p>病院は「ソ」軍に接收され大連に移動を命ぜられ第一九三兵站病院とともに重症患者は担送又は「ソ」軍自動車により、その他は全員徒歩にて大連に移動、重症患者約四七〇名は大連陸軍病院汐見分病棟にその他は実業学校および日之出国民学校に収容された</p> <p>病院は再び柳樹屯に帰還を命ぜられ重症患者および職員の一部、女子軍属を残留し柳樹屯に移動</p> <p>この際職員の一部患者の多数が別行動をとる</p> <p>病院は再三大連に移動を命ぜられ第一九三兵站病院長以下約一〇〇〇名（軽患者を含む）大連阜頭の倉庫に収容さる</p> <p>病院長以下重症患者約二〇〇名大連に移動衛生試験所に収容病院を開設</p> <p>九月二十四日柳樹屯に病院移動時残置せる女子軍属の一部病院に復帰</p> <p>病院は大連陸軍病院とともに海城に移動元鉄道第四連隊兵舎に収容された、そ</p>						

昭 20					年 月 日	第一九三兵站病院略歴 通称号 監第九四八二部隊	
8	8	6	6	6			概 要
14	9	30	27	15			
昭和二十年二月下旬中支武昌において第一四兵站病院が武昌陸軍病院の分院となり更に第一九三兵站病院に改編、編成を完了した 移駐のため中支漢口出発 満支国境山海関通過 関東州柳樹屯着 同日より柳樹屯陸軍病院の指揮下に入る 奉天方面より柳樹屯陸軍病院に後送される患者のうち主として結核患者を収療した 日「ソ」開戦 遼陽陸軍病院より柳樹屯陸軍病院に転送された患者のうち約一五〇名を収容					摘 要		

11	10	9	9	9	8
17	7	24	17	10	15
<p>停 戦</p> <p>入院患者中朝鮮人約三〇名を退院せしむ</p> <p>武装解除後病院を「ソ」軍に接収さる</p> <p>大連に移動を命ぜられ翌十八日重症患者を担送又は「ソ」軍の自動車により、その他は徒歩により大連に移動し重症患者は大連陸軍病院汐見分病棟に、その他は実業学校および日之出国民学校に収容</p> <p>病院は再び柳樹屯に帰還を命ぜられ柳樹屯陸軍病院とともに奥東軍第三勤務隊に収容された</p> <p>大連出発当時職員の一部および軽症患者の多くが別行動となつた</p> <p>又汐見分病棟に収容した重症患者約四七〇名および、これが診療のため職員の一部は残留</p> <p>重症患者を柳樹屯陸軍病院に委託し院長以下（含軽症患者）約一〇〇〇名は大連に移動を命ぜられ同地阜頭の倉庫に収容され大連港の船積作業に従事</p> <p>汐見分病棟収容者は大連陸軍病院とともに海城に移動元鉄道第四連隊兵舎に収</p>					

								昭 21	
	7	7	7	7	6	6	6	5	
	10	4	3	1	30	14	3	31	
博多上陸復員 「コロ」島出帆 「コロ」島着 奉天着 主力奉天移動時の残置者は他の病院の残留者とともに海城出発 博多上陸復員 「コロ」島着 奉天出発 会館に収容 重症患者一五・六名を海城陸軍病院に残置し他病院とともに奉天に移動、興亜 金州旅順等の各病院が収容されていた 容、つづいて大連阜頭倉庫収容者も退及合流した。この兵舎には大連、柳樹屯、	博多上陸復員 「コロ」島出帆 「コロ」島着 奉天着 主力奉天移動時の残置者は他の病院の残留者とともに海城出発 博多上陸復員 「コロ」島着 奉天出発 会館に収容 重症患者一五・六名を海城陸軍病院に残置し他病院とともに奉天に移動、興亜 金州旅順等の各病院が収容されていた 容、つづいて大連阜頭倉庫収容者も退及合流した。この兵舎には大連、柳樹屯、	博多上陸復員 「コロ」島出帆 「コロ」島着 奉天着 主力奉天移動時の残置者は他の病院の残留者とともに海城出発 博多上陸復員 「コロ」島着 奉天出発 会館に収容 重症患者一五・六名を海城陸軍病院に残置し他病院とともに奉天に移動、興亜 金州旅順等の各病院が収容されていた 容、つづいて大連阜頭倉庫収容者も退及合流した。この兵舎には大連、柳樹屯、	博多上陸復員 「コロ」島出帆 「コロ」島着 奉天着 主力奉天移動時の残置者は他の病院の残留者とともに海城出発 博多上陸復員 「コロ」島着 奉天出発 会館に収容 重症患者一五・六名を海城陸軍病院に残置し他病院とともに奉天に移動、興亜 金州旅順等の各病院が収容されていた 容、つづいて大連阜頭倉庫収容者も退及合流した。この兵舎には大連、柳樹屯、	博多上陸復員 「コロ」島出帆 「コロ」島着 奉天着 主力奉天移動時の残置者は他の病院の残留者とともに海城出発 博多上陸復員 「コロ」島着 奉天出発 会館に収容 重症患者一五・六名を海城陸軍病院に残置し他病院とともに奉天に移動、興亜 金州旅順等の各病院が収容されていた 容、つづいて大連阜頭倉庫収容者も退及合流した。この兵舎には大連、柳樹屯、	博多上陸復員 「コロ」島出帆 「コロ」島着 奉天着 主力奉天移動時の残置者は他の病院の残留者とともに海城出発 博多上陸復員 「コロ」島着 奉天出発 会館に収容 重症患者一五・六名を海城陸軍病院に残置し他病院とともに奉天に移動、興亜 金州旅順等の各病院が収容されていた 容、つづいて大連阜頭倉庫収容者も退及合流した。この兵舎には大連、柳樹屯、	博多上陸復員 「コロ」島出帆 「コロ」島着 奉天着 主力奉天移動時の残置者は他の病院の残留者とともに海城出発 博多上陸復員 「コロ」島着 奉天出発 会館に収容 重症患者一五・六名を海城陸軍病院に残置し他病院とともに奉天に移動、興亜 金州旅順等の各病院が収容されていた 容、つづいて大連阜頭倉庫収容者も退及合流した。この兵舎には大連、柳樹屯、	博多上陸復員 「コロ」島出帆 「コロ」島着 奉天着 主力奉天移動時の残置者は他の病院の残留者とともに海城出発 博多上陸復員 「コロ」島着 奉天出発 会館に収容 重症患者一五・六名を海城陸軍病院に残置し他病院とともに奉天に移動、興亜 金州旅順等の各病院が収容されていた 容、つづいて大連阜頭倉庫収容者も退及合流した。この兵舎には大連、柳樹屯、	博多上陸復員 「コロ」島出帆 「コロ」島着 奉天着 主力奉天移動時の残置者は他の病院の残留者とともに海城出発 博多上陸復員 「コロ」島着 奉天出発 会館に収容 重症患者一五・六名を海城陸軍病院に残置し他病院とともに奉天に移動、興亜 金州旅順等の各病院が収容されていた 容、つづいて大連阜頭倉庫収容者も退及合流した。この兵舎には大連、柳樹屯、	博多上陸復員 「コロ」島出帆 「コロ」島着 奉天着 主力奉天移動時の残置者は他の病院の残留者とともに海城出発 博多上陸復員 「コロ」島着 奉天出発 会館に収容 重症患者一五・六名を海城陸軍病院に残置し他病院とともに奉天に移動、興亜 金州旅順等の各病院が収容されていた 容、つづいて大連阜頭倉庫収容者も退及合流した。この兵舎には大連、柳樹屯、
病院長 田代六郎 医少佐									

オ十七内

昭 21						
6	6	6	5	5	12	9
14	2	1	20	19	中旬	12
<p>引つづき病院業務続行</p> <p>以降牡丹江陸軍病院より遼陽陸軍病院に転送された職員、患者約四〇〇名を収容</p> <p>旅順、金州、大連、柳樹屯陸軍病院第一九三兵站病院等の海城移動に伴い重症患者約五〇名を収容したが三〇名近く死亡した</p> <p>この期間の患者は前記の他その主力は第一〇八師団所属の者が多かつた</p> <p>第一〇八師団入「ソ」時患者約一五名が連行された</p> <p>職員三七名を残置し主力は他の病院とともに奉天に移動</p> <p>奉天着、国防会館に収容</p> <p>奉天出發</p> <p>「コロ」島着</p> <p>主力「コロ」島出發時職員一名を衛生勤務のため残置したがこれらの者は中共軍留用後逐次帰還</p> <p>主力博多上陸復員</p>						

才十八内

			昭 21
		7 7 6	
		10 2 30	
	博多上陸復員 病院長 医中佐 藤 沢 静	「コロ」島着	海城残留者職員以下一般邦人とともに海城出発

ス
十
ノ
四

							年 月 日	
			昭 20	昭 15	昭 11			
8	8	8	8	6	7	11		
22	15	14	9		10	10		
<p>「ソ」軍により武装解除されたが病院業務は続行</p> <p>終戦後満洲に家族を有する者を召集解除又は解雇備</p> <p>停戦</p> <p>患者約五〇〇名を柳樹屯陸軍病院に転送</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>当時の編成は本院は柳樹屯、分院は鞍山、湯崗子にあつた</p> <p>遼陽第一陸軍病院に改編</p> <p>爾後所在部隊の患者の収療に従事</p> <p>その後支那事変の発生に伴い北支部隊よりの後送患者の収療、前後送等に従事</p> <p>勅令第三八七号により遼陽陸軍衛戍病院を遼陽陸軍病院と改称</p>							<p>遼陽第一陸軍病院 略歴</p> <p>(関東軍第三九陸軍病院)</p> <p>通称号 満第三九七部隊、監第一五五二二部隊</p>	<p>概</p> <p>要</p>
							摘要	

							昭 2				昭 20
6	6	6	5	5	5	1	1	11	11	10	
14	7	2	31	20	19	15	14	下旬	10	25	
<p>職員、患者ともに多数病院と別行動をする者があつた 旅順陸軍病院遼陽到着とともに鞍山湯崗子両分院はその指揮下に入る 病院長以下職員二七名、患者約一七〇名鞍山に集合、入「ソ」 職員一二名中共軍に連行さる 中共軍の移動と共に残りの職員の一部を中共軍病院要員として資材とともに連 行さる 残留職員六名、重症患者約三〇名は資材もなく病院業務も不能となつたので遼 陽第二陸軍病院に合流 全員奉天に向つて出発 奉天着、興亜会館に収容 奉天出発 「コロ」島着 「コロ」島出帆 博多上陸復員 病院長 医大佐 大屋 音 市</p>											

昭 20						昭 16	年 月 日	概 要
9	8	8	8	8	8	7		
9	22	18	15	14	9	16		
<p>停戦後現地応召者の一部を召集解除又は解雇備した</p> <p>牡丹江陸軍病院よりの転送患者約九〇〇名を収容</p> <p>武装解除、病院業務は続行</p> <p>牡丹江陸軍病院より転送された看護婦および患者の一部を海城に転送</p>						<p>臨時編成下令により遼陽第一陸軍病院よりの差出人員を基幹として遼陽において編成完結</p> <p>爾後所在部隊および北支方面部隊よりの転送患者の収療ならびに前後送に従事</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>入院患者の大部を柳樹屯陸軍病院に転送</p> <p>停戦</p>		
							摘要	

遼陽第一陸軍病院略歴

(関東軍第五八陸軍病院)
通称号 満第五三五部隊、監第一五五二四部隊

	昭 21	昭 20
	6	6
	5	5
	5	5
	2	2
	1	12
	11	11
	14	2
	81	20
	19	7
	15	25
	10	10
<p>病院長以下職員三五名、軽症患者鞍山に集合、同地所在部隊とともに入「ソ」</p> <p>中共軍衛生勤務員として看護婦長江永スミ以下五名中共軍に連行さる</p> <p>入「ソ」、中共軍連行、資材の没収等により病院の機能を失いし遼陽第一陸軍病</p> <p>院の職員六名、重症患者約三〇名を収容</p> <p>中共軍第一三旅の衛生勤務員として救護看護婦五名中共軍に連行さる</p> <p>職員、患者全員奉天に移動</p> <p>奉天着、興亜会館に収容さる</p> <p>奉天出発</p> <p>「コロ」島着</p> <p>博多上陸復員</p> <p>病院長 医少佐 岡野勝江</p>		